

# いもりの里2011：井守も棲める谷津田・里山の復元と維持管理ネットワークの構築

## 目標

関東平野に典型的な荒廃した谷津田・里山（取手市の耕作放棄地）を舞台に、地域住民と行政、学術サイドが一体となって、アカハライモリ（絶滅が心配される日本固有の水生動物）も棲める上質の自然環境を復元する取り組みを通じて、生命環境教育・農業体験・地域産業振興活動などの様々な総合プログラムを展開する。これにより、農村・都市一体型の維持管理ネットワークを構築し、ここを「いもりの里」（地域の宝/サンクチュアリ）として次世代へ継承していくとともに、国際的イモリ・ストックセンターとして世界に発信していく。

**事業の背景：**  
関東平野には住宅地に隣接した谷津田・里山が多く点在し、それらのほとんどが耕作放棄地です。近年、谷津田・里山は希少生物の隠れ家として注目され、サンクチュアリとして位置づけられつつある一方、生物多様性の喪失に歯止めが止まらず（原因不明）、不法投棄や埋立ての危険にもさらされています。都市行政や地域住民は、これを如何に防ぎ、如何にして谷津田・里山の自然を「地域の宝」として次代に残していくか、これらの課題に直面しています。他方、学術サイドも危機感をもって、例えば、アカハライモリ（赤腹井守）は、我が国の固有種で、谷津田に棲む水生動物の代表格であるとともに、発生・再生に代表される生命科学の研究・教育に欠かせない実験動物ですが、近年その数は減少し、関東平野ではほとんど絶滅してしまいました（2006年、希絶滅危類種に指定されました）。生物資源の確保の観点から、イモリとイモリの棲む自然環境の保護・保全および研究・教育用イモリの大規模繁殖の必要性が叫ばれています。このような現状の中、それぞれの課題を抱えた茨城県取手市（地域住民と行政）と私達イモリ研究者グループ（イモリネットワークJRC、筑波大・千葉大が代表）は、平成21年10月に「いもりの里」協議会を発足し、課題解決に動き出しました。平成21-22年度に筑波大学社会貢献プロジェクトの支援を受けたことで、取手市貝塚・下高井地区の荒廃した谷津田（約3ha）・里山に、基礎整備以前（昭和40年代）の水田環境を復元し、平成22年11月にイモリを放流するまでに至りました。【経過はホームページ（http://imori-net.org/）で公開しています】。

**平成23年度**  
**目的**  
いもりの里を次代に継承していくために、持続可能な農村都市一体型の維持管理ネットワークを構築する。そのために、都市部住民を巻き込んだ生命環境関連の様々なイベントや総合学習プログラムを展開する。筑波大学グループは、学術活動（環境・生物相調査および放流したイモリの追跡と生態観察）を通じて、対象地で繰り広げられるイベント・プログラムに参加・協力する。

**成果の概要**  
市民（延べ560人）と大学院生・生物学類生（30人）が様々なイベント・学習活動を行いました。6月に開催した市民公開講座「今「いもりの里」が大切な理由（わけ）」や10月に開催したイベント「収穫祭」等の内容は新聞等で報道されました。固定会員「いもりの里フレンドクラブ会員」も増え（2012年3月現在、113名）、持続可能な維持管理ネットワークが着実に構築されつつあります。また、いもりの里の環境整備を継続しつつ、移入したアカハライモリの追跡調査をおこなっています。その結果、密度は低下したものの、確実にイモリは定着したと考えられます。

**新聞報道など：**  
「田植え」日本農業新聞（5/18）  
「市民公開講座、読売新聞（6/20）」  
「稲刈り」日本農業新聞（9/20）  
「収穫祭」朝日新聞（10/16）  
任天堂TVテレビ「ともでもサイエンス（イモリとヤモリの違い）」  
研究者が教える動物飼育「アカハライモリ」（日本比較生理生化学会編集）  
詳しい活動内容や進捗状況はホームページ（http://imori-net.org/）。



**今後の展開**  
農産物のブランド化 [地元 農林水産省・食と地域の交流促進対策交付金 進行中]  
生命環境教育プログラムの展開 [地元 花王みんなの森づくり 進行中]  
いもりの里を「モデル拠点」として谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの実践展開 進行中  
未来の里を「モデル拠点」として谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの実践展開 進行中  
未来の里を「モデル拠点」として谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの実践展開 進行中